

台風情報の見方・聞き方

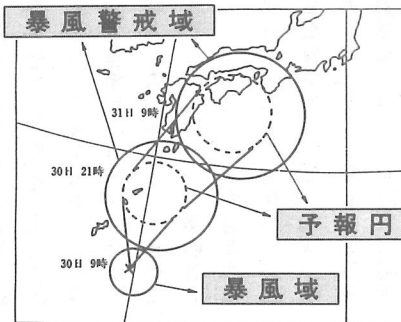
猛烈な風を伴い、大雨を降らせる台風は、しばしば大災害を引き起こします。刻々と変わる台風情報を正確に把握しましょう。

強さと大きさ

台風情報では、よく「小型でなみの強さ」とか「中型で強い」といった表現がみられます。これは、台風の勢力を大きさと強さの分類を基準にして表したものです。

小型で弱い台風でも、強い風と雨を伴うことも十分考えられますので安心は禁物です。

大きさの分類		強さの分類	
程度	1000ミリバールの等圧線の半径	階級	中心気圧
小さい	100km未満	弱い	990ミリバール以上
小型(小さい)	100~200未満	なみの強さ	960~989
中型(なみの大きさ)	200~300未満	強い	930~959
大型(大きい)	300~600未満	非常に強い	900~929
超大型(非常に大きい)	600以上	猛烈な	900未満



予報円と暴風警戒域

「予報円」というのは、台風を中心が到達すると予想される範囲のことで、この円内に入る確立は60%です。

暴風域は、平均風速で概ね毎秒25m以上の風が吹いていると考えられる範囲です。

暴風域の外側には、必ず強風域があり、これは予報図には表示されませんが、台風情報などで発表されますので、注目する必要があります。

大正12年9月1日

あの時 わたしは

布施明治 (明治23年11月15日生)

この記事は、氏が大正12年9月1日発行の乗車券をおもちであることを知り、訪問し、聞き取りにより書き綴ったものである。

しかし、行く先々火の手がまわり、江東橋も焼けた。その下を流れる川には、母親が幼い男の子の手を握ったまま死んでいる姿など、悲惨な光景ばかりであった。

現在、国技館が建っている場所には、当時、陸軍被服廠という大きな建物があり、相生警察署は、そこに大勢避難させた。刹那、旋風が起り、炎はその建物を一瞬にのみこみ、避難した4~5万人の命を奪ってしまった。

その日は、上野の山に逃げ、椎の大木の上で東京が焼けていく様子を見て一夜を明かした。

翌2日、枕木のような黒こげになった無数の死骸をまたいで、亀戸にたどりついた。

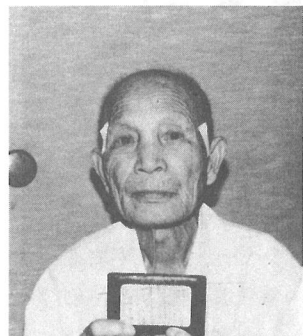
橋に戻り、家族の無事を確認した。

その日来、どの駅にも監視所が設置され、物をもって見舞の名目でなければ、東京に行けなくなった。

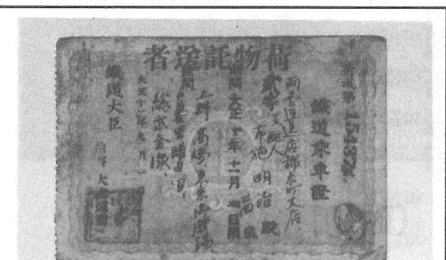
震災発生から4日目、大旦那さんの安否を気づかい、住まいのある市川を見舞った。その後は東京に行き、被災地の跡片付けに明け暮れる毎日であった。

やがて復興局ができ、焼け野原となった東京の街にも、バラックながら人家が建っていった。

——ひと言づつ、かみしめるように語るその黒い瞳は、遠いあの日をもつめるようであった。



大正12年9月1日付の乗車証を手にする布施明治さん



この乗車券は、運送業を営む店が国鉄に納めた金額に応じ発行された優待券で、所謂、無賃乗車券です。有効期間は3か月。実際には、1週間前に交付を受けたものです。期限後は、返還する訳ですが、震災のため再発行され、1枚を記念として保管していたそうです。